論　文

古典ギリシャ語の構文論研究

–ポリュビオス『歴史』における συμβαίνειν の用例の分析に基づいて–

竹島　俊之

1. ポリュビオスについて

ポリュビオス（前 201-120 年頃）は名を挙げるに値するこの時期の唯一の歴史家である。彼はメガロポリスの出身で、アカイア同盟の指導者リュコルタースの子である。

彼の家系とその傑出した才能によって故郷における恵まれた地位への道が早くから開かれた。181 年にはアレクサンドレイアの宮廷への外交使節に選ばれ、169 年にはアカイア同盟の騎兵隊の役職に就き、2 年後人質としてローマへ送られた 1000 人のアカイアの上流階級の中の一人であった。そこに 16 年間押し止められた。ローマの敵として、少なくともこの国が優位に立つのを防ごうとし、静観的な中立を支持した一人として来たのであったが、この国家を注視し、重要な人物たちと親密に交際することによって、熱狂的な賛美者となり、ローマの世界覇権を確信した代弁者となった。アエミリウス・パウルスの家と親交を結び、ポリュビオスを師として、心酔した尊敬の念をもって接した若いスキピオ・アエミリアヌス Scipio Aemilianus の遠征に後に (150 年) 同行した。このようにして彼はこの国家をすぐ間近から知ることとなったのである。133 年、スキピオと共にヌマンティアの面前にいた。この町を占拠した後、スペインの南と西海岸、南ガリアを旅行した。

征服された同郷の人々の仲介者として彼は登場し、彼らに寛大な処置を勝ち得るためにローマの貴族との関係を大いに利用した。そのために多くのギリシャのポリスから功績を称える栄誉をおびただしく与えられた。パウサニアス (VIII 30) はメガロポリスのアゴラで、韻文で書かれた顕彰碑を見たと述べている。

彼の『歴史』Ἱστορίαι は 40 巻から成っているがそのうち最初の 5 巻が完全な形で残されている。1 巻-16 巻と 18 巻の膨大な抜粋が Urbino の写本で残されて

おり、最後の残りはコンスタンティノス・ポルピュロゲネトスの抜粋で残されている。17 巻, 19 巻、37 巻と 40 巻は全く残されていない。

1 巻は 266-221 年のローマとカルタゴの歴史を含んでいる。221 年から本来の作品が始まる。ギリシャ、アジア、イタリア、リビアの出来事を均等に包含している。当時知られていた世界の様々な国家がいかにして、ローマの支配下に入るようになったかという主導的な中心思想によって、多様な事柄が統一のために結びつけられる。ローマ帝国の拡大は 221-168 年の間のハンニバル、フィリポス、アンティオコス、ペルセウスとの戦争で生じたことが 3-29 巻の中で描かれている[1)]。

2. ポリュビオスの形態論的特性について

この時代はもちろんコイネー・ギリシャ語の時代であるが、この『歴史』全体は、全盛期の美しいアッティカ方言で記述されている。

コイネー・ギリシャ語と判断される語形は散発的にしか見いだされない。たとえば、

καθ' οὓς χρόνους Πέρσαι τῆς 'Ασίας ἐπεκράτουν, <u>ἔδωκαν</u> τοῖς ἐπί τινας τόπους τῶν μὴ πρότερον ἀρδευομένων ἐπεισαγομένοις ὕδωρ πηγαῖον ἐπὶ πέντε γενεὰς καρπεῦσαι τὴν χώραν. X 28, 3

ペルシャ人がアジアを支配していた時に、それまで灌漑されていなかった土地に泉の水を引いた人々に 5 世代にわたってその土地を利用する権利を与えた。(アッティカ方言 ἔδοσαν aor.3pl.)

καθάπερ ἀρτίως <u>εἶπα</u>, XVI, 4, 4

たった今私が言ったように

(アッティカ方言 εἶπον, aor.1.sg.)

τὸν αὐτὸν δὲ λόγον τοῦτον οἱ 'Ρωμαῖοι καὶ πρὸς 'Ηπειρώτας <u>εἶπαν</u> περὶ Φιλίππου X, 27, 4

フィリポスについてこの同じ言葉をローマ人たちは本土の人たちに対して言った。(アッティカ方言 εἶπον, aor.3.pl.)

3. ポリュビオスの構文論的特性について

'Επειδὴ δὲ τὰ μὲν τῆς ἐαρινῆς ὥρας ὑπέφαινεν ἤδη, τῷ δὲ Σκιπίωνι διηρεύνητο

πρὸς τὴν προειρημένην ἐπιβολὴν τὰ κατὰ τοὺς ὑπεναντίους, τὰς μὲν νῆας καθεῖλκε καὶ μηχανὰς κατεσκεύαζε ταύταις ὡς πολιορκήσων ἐκ θαλάττης τὴν Ἰτύκην, τοῖς δὲ πεζοῖς, οὗσιν ὡς δισχιλίοις, κατελάβετο πάλιν τὸν ὑπὲρ τὴν πόλιν κείμενον λόφον, καὶ τοῦτον ὠχυροῦτο καὶ διετάφρευε πολυτελῶς, τοῖς μὲν ὑπεναντίοις ποιῶν φαντασίαν ὡς τοῦτο πράττων τῆς πολιορκίας ἕνεκα, τῇ δ' ἀληθείᾳ βουλόμενος ἐφεδρεύειν τοῖς κατὰ τὸν τῆς πράξεως καιρόν, ἵνα μὴ τῶν στρατοπέδων ἐκ τῆς παρεμβολῆς χωρισθέντων οἱ τὴν Ἰτύκην παραφυλάττοντες στραπῶται τολμήσαιεν ἐξελθόντες ἐκ τῆς πόλεως ἐγχειρεῖν τῷ χάρακι διὰ τὸ σύνεγγυς εἶναι, καὶ πολιορκεῖν τοὺς φυλάττοντας. (XIV, 2, 1-4)
春の最初の先触れが現れ、スキピオが計画した攻撃のための敵にたいする調べを終えたとき、ウティカを海の側から攻撃するかの如くに彼は船を水に降ろさせそれに機械を備えさせた。2000 人の歩兵でポリスの上にある丘を新たに占拠し、そしてこれを塁壁と濠で入念に堅固にした、敵に包囲のためにこうしているのだという印象を与えるために。実際は攻撃の時に防御を固めるためだった。彼の軍団が陣地を離れた時に、ウティカの駐留部隊が距離があまり離れていない町からの奇襲によってそれを包囲するのでは、と恐れたからであった。

この長文を読みとって行く作業は、どのようにして行われるのであろうか。ὑπέφαινεν <現れ>、διηρεύνητο<調査された>, καθεῖλκε <引き降ろさせ>、κατεσκεύαζε <備えさせた>、ὡς πολιορκήσων <攻撃するかの如く>、κατελάβετο <占拠し>、ὠχυροῦτο <防御を固めた>、διετάφρευε <濠で守った>、ποιῶν<作りながら>、πράττων <行いながら>、といった一つ一つの短い定動詞句、分詞句を適切に読みとっていくこと、τῶν στρατοπέδω ... χωρισθέν-των <陣営が引き離された時に>という独立属格句に気をつけること、英語やドイツ語で関係代名詞が使用される連体表現では、παραφυλάττοντες <護衛している>、ἐξελθόντες <出てきて>、φυλάττοντας <守っている者たちを> などの分詞句が使われるということも明瞭に意識しておかないといけない、と思われる。

なお格関係は格語尾によって明示されるので、ドイツ語の文献を読んで行く場合とまったく同様に短い動詞句内の語順は全く気にしなくてよいのである。さらに βουλόμενος ἐφεδρεύειν <見張ろうとして>、τολμήσαιεν ... ἐγχειρεῖν τῷ χάρακι <陣営を襲うことを彼らが敢えてしないかと> などの私が連鎖詞と呼ぶ裸の不定詞句を補語にとる動詞の使い方も十二分に注意しなければならない、

と私は考える。

なぜなら補助動詞は、話し手が聞き手に対して情報内容を特定したり、判断を伝える動詞であり、言語の二重性を考慮するとき情報学的に見て非常に重だと考えられるのである。

4. 連鎖詞

F.R. パーマーは英語の動詞を次のように分類している[2)]。

1. 助動詞

(a) 一次助動詞:BE, HAVE, DO

(b)二次（または法）助動詞:WILL, SHALL, CAN, MAY, MUST, OUGHT, DARE, NEED（そして、おそらく USED）

2. 本動詞

(a) 連鎖詞 (CATENATIVES): WANT, KEEP その他の多くの動詞。

(b) 非連鎖詞 (NON-CATENATIVES): 上記以外のすべての動詞。

さて、古典ギリシャ語では英語で助動詞に分類される動詞、たとえば must に対応する動詞 χρή も連鎖詞 want に対応する動詞 βούλεσθαι などもすべて裸の不定詞句を補語にとるので、ギリシャ語の動詞は不定詞句を補語にとる連鎖詞とそうした補語をとらない本動詞に二分することができる。

本稿では連鎖詞を Ca で表記することにし、不定詞句は I で表記することにする。さらに Ca (+) は連鎖詞が不定詞句の前に発話され、Ca (-) は連鎖詞が不定詞句の後に発話されることを意味し、I (+) は不定詞句において動詞の不定詞が最初に発話され、I (-) は動詞の不定詞が最後に発話されることを意味する。

筆者は論文「ギリシャ語の連鎖詞の研究（1）」では、βούλεσθαι＜欲する＞、ἐθέλειν＜望む＞という連鎖詞の用例を『イーリアス』、『オデュッセイア』、ソフォクレス、ヘロドトス、トゥキュディデースの作品を資料として調査し、次のような結果を得た[3)]。

(1) 構造式　Ca (+)・I (-)

先ず連鎖詞を述べ、その後に補語となる不定詞句がくる構文である。そしてその不定詞句においては動詞は最後に位置する。すなわち現代ドイツ語の話法の助動詞構文と同じ構文である。

βουλοίμην δ' ἂν ἐγώ γε καὶ ἄλγεα πολλὰ μογήσας
οἴκαδέ τ' ἐλθέμεναι καὶ νόστιμον ἦμαρ ἰδέσθαι.　γ 233–234

たとえ沢山の困難に遭おうとも、家に帰り、帰国の日を見ることを私は望むだろう。

(2) 構造式　Ca (+)・I (+)

先ず、連鎖詞を述べ、次に補語となる不定詞句がくる構文である。そしてその不定詞句は動詞で始まる構文である。すなわち現代英語の助動詞構文と同じ構文である。

ἀλλὰ βόλεσθε / αὐτόν τε ζῷειν καὶ ἔχειν πατρῴα πάντα　π 387–388
彼が生きていて、遺産を全部持つことをお前たちが望むなら

(3) 構造式　Ca (-)・I (-)

最初に、動詞で終わる不定詞句が述べられ、次にそれを支配する連鎖詞が発話される構文である。これは日本語の連鎖詞と補語の関係とちょうど同じである。

ἄφαρ κέ τοι αὐτίκα δοῦναι / βουλοίμην　ψ 593–594
すぐにでもあなたに差し上げたいと、思います。

(4) 構造式　Ca (-)・I (+)

連鎖詞は不定詞句の後に発話され、不定詞句が動詞で始まる構文である。

τείσασθαι τῆς πρόσθε δουλοσύνης βουλόμενος　Hdt 4.118.4
先の隷従の恨みを晴らしたいと思って。

これらの用例の調査結果を数量調査してみると、次のようになる。

βούλεσθαι

構造式	Ca (+) I (-)	Ca (+) I (+)	Ca (-) I (-)	Ca (-) I (+)
『イーリアス』	8 (80%)	1 (10%)	1 (10%)	0 (0%)
『オデュッセイア』	11 (64%)	6 (36%)	0 (0%)	0 (0%)
ソフォクレス	10 (50%)	3 (15%)	5 (25%)	2 (10%)
ヘロドトス	73 (66%)	36 (24%)	8 (7%)	3 (3%)
トゥキュディデース	132 (77%)	35 (20%)	3 (2%)	2 (1%)

ἐθέλειν

構造式	Ca (+) I (-)	Ca (+) I (+)	Ca (-) I (-)	Ca (-) I (+)
『イーリアス』	60 (70%)	24 (28%)	2 (2%)	0 (0%)
『オデュッセイア』	58 (83%)	8 (11%)	3 (4%)	1 (2%)
ソフォクレス	13 (40%)	4 (12%)	14 (42%)	2 (6%)
ヘロドトス	63 (58%)	28 (26%)	12 (11%)	6 (5%)
トゥキュディデース	48 (89%)	6 (11%)	0 (0%)	0 (0%)

「古典ギリシャ語の統語論上および構文論上の特性について－δοκεῖν ＜と思われる＞の用例の分析に基づいて－[4)]」においても同じ資料を用いて、同じ調査をしたのであるが、βούλεσθαι, ἐθέλειν の用例の場合とほぼ同じ結果を得ることができた。

従って、古典ギリシャ語の場合、連鎖詞と不定詞句の関係式は現代ドイツ語の話法の助動詞構文である構造式(1)を基本構文として認めてもよいという確信を得ることができた。

5. ポリュビオスの συμβαίνειν の分析

この論文ではポリュビオスの『歴史』を資料として συμβαίνειν の用例を分析して、これまでに立証してきた事柄がこの言語の普遍的事実であることを証明したい。

συμβαίνειν ＜（出来事・事態などが）たまたま生ずる；ある；ある状態になる；結果として生ずる、～という結果になる；impers.～という結果になる＞
資料はポリュビオス『歴史』１巻～３巻を用いる。

(1) 構造式　Ca (+)・I (-)

ἀγωνιῶν δὲ μὴ <u>συμβῇ</u> τὸν ἐπιπαραγινόμενον στρατηγὸν ἐκ τῆς Ῥώμης φθάσαντα τὴν ἐπιγραφὴν τῶν πραγμάτων <u>λαβεῖν</u>.　I, 31, 4
ローマから来た次の後継者が勝利の栄誉を自分の物にするのではないかと懸念して

διόπ <u>συμβαίνει</u> τῶν ἀπὸ τοῦ στόλου πληρωμάτων τὸ πλεῖστον μέρος ἔν τε τοῖς ἔργοις καὶ τῇ καθόλου πολιορκίᾳ <u>διεφθάρθαι</u>.　I, 49, 1
艦隊の乗組員の大部分は防御と全体的な包囲攻撃の際に命を落とすことになっ

たと、

ἐξ οὗ συνέβαινε παραβόλως μὲν ὑπομένειν καὶ διακινδυνεύειν πολιορκουμένους τοὺς τὴν κορυφὴν κατέχοντας τῶν Ῥωμαίων, ἀπίστως δὲ τοὺς Καρχηδονίους ἀντέχειν, I, 58, 3
ローマ軍の山頂を押さえている兵士たちは包囲されつつ予想外に持ちこたえ、あらゆる危険をおかして防戦し、カルタゴ軍も信じられないほどに、もちこたえるということになった。

συνέβαινε τοὺς περὶ τὸν Μάθω πάντας τοὺς διὰ τῶν προειρημένων λόφων εὐκαίρως κειμένους τόπους φυλακαῖς διειληφέναι, I, 75, 4
マトースに率いられた一隊は前述の丘に通じる箇所をすべて守備隊で占拠するということになった。

ἃ δὴ τότε συνέβαινε καὶ περὶ μὲν τὸ σύστημα τῶν μισθοφόρων, ἔτι δὲ μᾶλλον περὶ τοὺς ἡγεμόνας αὐτῶν ὑπάρχειν. I, 81, 11
このことが当時、傭兵隊の組織、とくに彼らの指導者たちの周辺で起こるということになったのである。

ἐν οἷς καιροῖς συνέβη ταῖς μὲν ἐπιβολαῖς καὶ τόλμαις μηδὲν αὐτοὺς λείπεσθαι τῶν ὑπεναντίων, διὰ δὲ τὴν ἀπειρίαν πολλάκις ἐλαττοῦσθαι. I, 84, 5
その折り、彼らは作戦と豪胆さという点では敵に決してひけをとらなかったが、経験がないために遅れをとるということになった。

ἅς ἔτι καὶ νῦν συμβαίνει διαμένειν, II, 41, 7
それらは今も存続している。

ὃ καὶ συνέβη γενέσθαι, III, 11, 2
そのことが起こるということになった。

συνέβη τὰ ὅλα παραδόξως καὶ κατὰ λόγον αὐτῷ χωρῆσαι. III, 14, 5
すべては思いがけず、彼の計算通りに進行するということになった。

ὅταν δὲ δὴ καὶ τοῖς πολεμίοις <u>συμβαίνῃ</u> τὴν ἐναντίαν ἐλπίδα ταύτης ὑπάρχειν. III, 63, 13
敵がこれと反対の希望を持つということになったときに

παραπλήσια δὲ τούτοις <u>συνέβαινε</u> καὶ περὶ τοὺς ἵππεῖς <u>γίνεσθαι</u> καὶ περὶ τὸ σύμπαν αὐτοῖς στρατόπεδον. III, 73, 4
騎兵隊に関しても彼らの全軍に関してもこのような状態になったのである。

この他にこの構造式で把握されるのは次の箇所である。I, 19, 10 / I, 20, 16 / I, 30, 8 / I, 37, 2 / I, 39, 9 / I, 48, 5 / I, 50, 9 / I, 58, 8 / I, 65, 1 / I, 67, 11 / I, 77, 7 / I, 85, 7 / II, 15, 3 / II, 23, 6 / II, 30, 6 / II, 41, 7 / II, 41, 9 / II, 55, 5 / II, 64, 6 / II, 68, 10 / III, 19, 10 / III, 42, 9 / III, 55, 8 / III, 61, 7。

(2) 構造式　Ca (+) · I (+)

ὅσῳ δὲ μείζω <u>συνέβαινε</u> <u>γίνεσθαι</u> τὴν δυσχρησίαν περὶ τοὺς ὑπεναντίους διὰ τὰς προειρημένας αἰτίας, I, 48, 7
前述の理由で敵側の不利が大きくなればなるほど、

τούτους γὰρ αὐτοὺς ἀεὶ <u>συνέβαινε</u> <u>διαφθείρεσθαι</u> κατὰ τὰς συμπλοκάς, τοὺς ἐν χειρῶν νόμῳ περιπεσόντων. I, 57, 8
この戦闘では白兵戦に巻き込まれた者だけが命を落とすということになった。

δι᾽ ἄλλου τρόπου <u>συνέβη</u> <u>λαβεῖν</u> τὸν πόλεμον τὴν κρίσιν. I, 58, 6
戦争は他の方法で決着を見る、ということになった。

ὃ καὶ τότε <u>συνέβη</u> <u>γενέσθαι</u> περὶ αὐτούς. I, 67, 7
そのことが当時彼らに関して起こることになったのである。

<u>συνέβη</u> τοὺς Ἰλλυριοὺς ἐπὶ πολὺν χρόνον ἀντιποιησαμένους τέλος <u>ἐκπεσεῖν</u> ἐκ τῆς πόλεως. II, 9, 5
長時間抵抗したイリュリア人は結局ポリスから追い出される、ということになった。

συνέβη λειφθῆναι τοὺς Ἠπειρώτας, καὶ πολλοὺς μὲν αὐτῶν πεσεῖν, ἔπ δὲ πλείους ἁλῶναι, τοὺς δὲ λοιποὺς διαφυγεῖν ὡς ἐπ' Ἀπυτάων. II, 5, 8
大陸部は占拠され、彼らの多くは戦死し、さらに多くは捕虜となり、残りはアティンタニアに逃亡する、ということになった。

ταῦτα δὲ συνέβαινεν γίνεσθαι τῷ τρίτῳ πρότερον ἔτει τῆς Πύρρου διαβάσεως εἰς τὴν Ἰταλίαν, πέμπτῳ δὲ τῆς Γαλατῶν περὶ Δελφοὺς διαφθορᾶς. II, 20, 6
これはピュロスのイタリアへの過渡の3年前、ガラティア人のデルフィでの敗北の5年前に起こった。

συνέβη διαφθαρῆναι μὲν τῶν Ῥωμαίων οὐκ ἐλάττους ἑξακισχιλίων, τοὺς δὲ λοιποὺς φεύγειν. II, 25, 9
ローマ人の6000人より少なからぬ者が戦死し、残りは逃亡する、ということになった。

εἰ γὰρ συνέβη βραχὺ μόνον πεσθῆναι τῇ χώρᾳ τοὺς ἄνδρας κατὰ τὴν μάχην. II, 33, 8
もし兵士たちが戦いで少しでも後退する、ということになったら、

συνέβη τὰς κατ' ἐκείνους τοὺς τόπους Ἑλληνικὰς πόλεις ἀναπλησθῆναι φόνου καὶ στάσεως καὶ παντοδαπῆς ταραχῆς. II, 39, 3
その地方のギリシャのポリスは殺戮や内乱そしてさまざまな混乱で満たされるということになった。

ὅπ συμβαίνει τὰς δυνάμεις ὁμοθυμαδὸν ἡρῆσθαι στρατηγὸν Ἀνιβαν, III, 13, 4
兵士たちは一致してハンニバルを指導者に選ぶことになったと、

ὑφ' ὧν συνέβη καθερωθῆναι καὶ τὸ τοῦ Διὸς ἱερὸν τοῦ Καπετωλίου. III, 22, 1
彼らによってカピトルのゼウス神殿も奉献されることになったのである。

この他に I, 3, 4 / I, 18, 1 / I, 18, 10 / I, 42, 7 / I, 45, 9 / I, 46, 3 / I, 48, 9 / I, 57, 8 / I, 58, 6 / I, 75, 6 / I, 77, 6 / II, 28, 10 / II, 30.3 / II, 32, 1 / II, 41, 12 / III, 53, 10 / III, 65, 7 / III, 74, 1。

(3) 構造式　Ca (-)・I (-)

οὐ μόνον τὰ σώματα τῶν ἀνθρώπων καί πινα τῶν ἐν αὐτοῖς γεννωμένων ἑλκῶν καὶ φυμάτων ἀποθηριοῦσθαι συμβαίνει καὶ τελέως ἀβοήθητα γίνεσθαι, I, 81, 5
人間の身体とその中に生じた傷と腫瘍が激しくなり、ついには治療できなくなるだけでなく、

τοῖς δὲ περὶ τὸν Μάθω καὶ Σπένδιον οὐχ ἧττον πολιορεῖσθαι συνέβαινεν ἢ πολιορκεῖν I, 84, 1
マトース側とスペンディオス側は包囲すると同様に包囲される状況になった

οὐ γὰρ πσὶν, ἀλλὰ πᾶσι τότε κοινοὺς ἐχθροὺς εἶναι συνέβαινε τοὺς Ἰλλυριούς. II, 12, 6
というのもイリュリア人は当時、ある人たちの敵というのではなく、全ての人の共通の敵ということになった。

τὰς Ἄλπεις αὐτὰς ἐπὶ τρισχιλίους καὶ διακοσίους σταδίους παρήκειν συμβαίνει, II, 14, 9
アルプス自体は2200スタディオンにわたって、延びているということになる。

γενομένης δ' ἀμφιστόμου τῆς τῶν Κελτῶν δυναμέως, οὐ μόνον καταπληκτικὴν ἀλλὰ καὶ πρακτικὴν εἶναι συνέβαινε τὴν τάξιν. II, 28, 6
ケルト軍は二重の前戦を形成することにより、その配置は恐怖を惹き起す様相を呈するだけでなく実戦にも適するものとなった。

ὧν τὸν μὲν Εὔαν, τὸν δ' ἕτερον Ὄλυμπον καλεῖσθαι συμβαίνει, II, 65, 8
そのうちの一つは、エウアース、もう一方はオリュムポスと呼ばれている

τῶν δὲ κατὰ μέρος ἐν αὐτῇ γεγονότων ἀρχὰς μὲν εἶναι συμβαίνει τοὺς προειρημένους πολέμους, III, 1, 9
その時期に次々と起こった出来事の始まりは先に述べた戦争である、ということになる。

ὧν τοὺς μὲν Ἰνδοὺς ἀπολέσθαι συνέβη πάντας, τοὺς δ' ἐλέφαντας διασωθῆναι.

III, 46, 11
そのうち象使いはすべて死に、象は救われるということになった。

ταύτην μὲν εὐδιάκοπτον εἶναι συνέβαινε III, 55, 1
これは容易に突き抜けれた、

その他に I, 28, 4 / I, 35, 7 / III, 36, 1 / III, 73, 2。

(4) 構造式 Ca (-)・I (+)

Εἰ μὲν τοῖς πρὸ ἡμῶν ἀναγράφουσι τὰς πράξεις παραλελεῖφθαι συνέβαινε τὸν ὑπὲρ αὐτῆς τῆς ἱστορίας ἔπαινον, I, 1, 1
我々以前の歴史家によって歴史に対する賞賛が無視されたままであるという結果になっていたとしたら、

τὴν μὲν ουν σύμπασαν Σικελίαν τῇ θέσει τετάχθαι συμβαίνει πρὸς τὴν Ἰταλίαν καὶ τἀκείνης πέρατα παραπλησίως τῇ τῆς Πελοποννήσου θέσει πρὸς τὴν λοιπὴν Ἑλλάδα καὶ τὰ ταύτης ἄκρα, I, 42, 1
全シシリアのイタリアおよびその最南端に対する位置関係はペロポネソス半島の残りのギリシャおよびその最先端との位置関係にほぼ等しい、ということになる、

διαφθαρῆναι συνέβη κατὰ θάλατταν ὁλοσχερῶς ὑπὸ χειμῶνος. I, 82, 6
彼らは海の嵐で壊滅するということになった。

διότι κατειλῆφθαι συμβαίνει τὴν τῶν Ἀργείων πόλιν ὑπὸ τῶν Ἀχαιῶν, II, 53, 5
アルゴス人のポリスがアカイアに占拠されたと、

καὶ πόθεν φῦναι συνέβη τὸν πρὸς τοὺς Πέρσας πόλεμον, III, 6, 9
ペルシャに対する戦争は何から生ずることになったのか

6. 結論

以上の例証文から明きらかなように、古典ギリシャ語において構文論上、連鎖詞と不定詞句の間、および不定詞句の内部における語順は現代ドイツ語とま

ったく同様に、先ず、連鎖詞を発話し、これに不定詞句が後続、さらにその不定詞句内部では動詞が最後に発話される構文を基本構文と捉えることができる。そしてこのことをギリシャ語学習の最初から知っていると、容易に古典ギリシャ語の書き言葉への世界へと入っていけると確信することができた。

註

1) Wilhelm von Christ, *Geschichite der Griechischen Literatur.* Zweiter Teil : Die nachklassische Periode der Griechishen Literatur. Erste Hälfte : von 320 vor Christus bis 100 nach Christus. Bearbeitet von Wilhelm Schmidt 1959 C.H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung, S. 383ff.
2)『英語動詞の言語学的研究』F.R.パーマー著　安藤貞雄訳注　1972 年　大修館書店　p.20.
3) 竹島俊之「ギリシャ語の連鎖詞の研究（1）」『言語文化研究』第 13 巻 1987 年.
4)『吉川守先生御退官記念言語学論文集』渓水社、1995 年、S. 179ff.

資料

Polybivs Historiae, Bibliotheca Scriptorvm Graecorvm Romanorvm Tevbneriana.

Zum Problem des Satzbaus im Altgriechischen

– Auf Grund der Analyse von συμβαίνειν

in *Historiae* des Historikers Polybios –

Toshiyuki TAKESHIMA

Im allgemeinen wird angenommen, daß der Satzbau des Altgriechischen bei weitem flexibler als der der modernen Sprachen z.B. des Neugriechischen bzw. Deutschen sei. Dies bedeutet willkürliche Verwendung der Wortstellungsvariationen innerhalb desselben Textes. Zum Beispiel sollte man als Strukturformeln der Sätze, die aus dem finiten Hilfsverb, dem Infinitiv und den übrigen Gliedern im Infinitivsatz bestehen, theoretisch folgende vier Typen unterscheiden.

Die Strukturformel (1) [Ca (+) · I (-)]

Nach dem Hilfsverb ("Catenate verb") kommt ein Infinitivsatz. Innerhalb des Infinitivsatzes wird der Infinitiv in die Ende gesetzt.

Die Strukturformel (2) [Ca (+) · I (+)]

Zunächst sagt man ein Hilfsverb und daran anschließend einen Infinitivsatz aus. In dem Infinitivsatz wird jedoch der Infinitiv zuerst ausgesagt.

Die Strukturformel (3) [Ca (-) · I (-)]

Im Gegensatz zu (1) und (2) beginnt man mit einem Infinitivsatz und danach kommt ein Hilfsverb. Innerhalb des Infinitivsatzes steht der Infinitiv am Ende wie bei (1).

Die Strukturformel (4) [Ca (-) · I (+)]

Genauso wie (3) geht der Infinitivsatz dem Hilfsverb voraus. Innerhalb des Infinitivsatzes steht dagegen der Infinitiv vor den anderen Gliedern.

Bereits in meinen früheren Studien habe ich bewiesen, daß repräsentative Schriftsteller in der archäischen und klassischen Periode wie Homer, Sophokles, Herodot und Thukydides eine intensive Vorliebe für die erste der vier Satzstrukturformeln gezeigt haben, z.B.

βουλοίμην δ' ἂν ἐγώ γε καὶ ἄλγεα πολλὰ μογήσας
οἴκαδε τ' ἐλθέμεναι καὶ νόστιμον ἦμαρ ἰδέσθαι, γ 232-233
'Ich freilich zöge es vor nach der Fülle bitterer Leiden
Heimzugelangen; erleben möchte ich die Stunde der Rückkehr,'

Daraus folgend kann man die Strukturformel (1) [Ca (+) • I (-)] als die grundlegende im Homerischen und klassischen Griechisch betrachten.

In dieser Abhandlung versuche ich die obige Behauptung mittels der Analyse eines Textes in der hellenistischen Periode, das ist, die *Historiae* des Historikers Polybios (201 v. Chr. - um 120 v. Chr.) zu stützen. Besonders ausführlich wird das Hilfsverb, συμβαίνειν 'sich ereignen, sich ergeben' und der davon regierte Infinitivsatz behandelt. Wenn man die Beispiele, die diese zwei Bestandteile enthalten, gemäß den vier oben erwähnten Strukturformeln klassifiziert, stellt es sich sogleich heraus, daß der folgende Typ am häufigsten vorkommt:

συνέβαινε τοὺς περὶ τὸν Μάθω πάντας τοὺς διὰ τῶν προειρημένων λόφων
εὐκαίρως κειμένους τόπους φυλακαῖς διειληφέναι, Polyb. I, 75, 4
' ... hatte Mathos alle diese Punkte mit Wachen besetzt,'
συνέβη τὰ ὅλα παραδόξως καὶ κατὰ λόγον αὐτῷ χωρῆσαι. Polyb. III, 14, 5
'... ging die Schlacht wider Erwarten zu seinen Gunsten aus.'

In diesen Beispielen tritt das Hilfsverb vor dem Infinitivsatz auf, und der Infinitiv nimmt die Endstellung innerhalb des Infinitivsatzes ein.

Daraus folgt, daß man die Strukturformel (1) [Ca (+) • I (-)] dennoch normalerweise als Grundformel im Altgriechischen betrachten kann. Aus typologischer Perspektive ist interessant, daß der altgriechische grundlegende Satzbau, der vom Hilfsverb und dem Infinitivsatz gestaltet wird, unerwarteterweise genau mit dem deutschen Rahmenbau übereinstimmt, im Gegensatz zu der gewöhnlichen Ansicht, daß das Altgriechische mehr Varianten der Satzgliederstellung als das Deutsche zulasse.